

# プラハ言語学サークルの第3テーゼ

(The Third Thesis Presented By The Prague Linguistic Circle)

Itaru Iijima

飯 島 周

## Summary

In this paper we examine some basic linguistic concepts contained in the third of the ten theses which the Prague Linguistic Circle presented in 1929, by translating it from the Czech original into Japanese.

The third thesis deals with the functions and functional systems of language, proposing a new methodology to analyze them. In particular, the characteristics of the standard literary language and poetic language are specified and the relations between them are explained.

Some problems caused by translation are also discussed and important terms (e. g. *spisovný jazyk*, *aktualizace*, *přeformování*, etc.) are scrutinized to clarify the ideas of the Circle, as represented by B. Havránek and J. Mukařovský in this thesis.

Key words : functionalism, language, linguistics, poetics, Prague School

<はじめに><sup>(1)</sup>

1929年プラハで開催された第1回スラヴ学者国際会議では、チェコ語で書かれた10項目から成るプラハ言語学サークルのテーゼがハンドアウトの形で提示され、討議の対象となった。このテーゼの各項の標題は次の通りである。

1. 体系としての言語という概念から生ずる方法論的諸問題とスラヴ諸語にとってのこの概念の意義  
(共時論的方法と通時論的方法に対するその関係、構造的比較対系統的比較、各種言語現象の発展の偶然性又は規則的一致性)
  - a. 機能的体系としての言語の概念
  - b. 共時論的方法の諸課題：通時論的方法との関係
  - c. 比較的方法を用いることの新しい可能性
  - d. 各種言語現象の発展の規則的一致性
2. 言語体系、特にスラヴ語の体系の検討課題
  - a. 言語の音声面についての研究
  - b. 単語と単語統合についての研究
3. 各種の機能的言語組織についての、特にスラヴ諸語における研究の諸問題
  - a. 言語の各種機能について
  - b. 標準文語について
  - c. 詩的言語について
4. 教会スラヴ語の現実的諸問題
5. スラヴ諸語における音声学のおよび音韻論的転写の諸問題
6. 言語地理学の諸原理、スラヴ領域における民族地理学へのその適用と関連性
7. 全スラヴ言語地図、特に語彙地図の諸問題
8. スラヴ語の語彙研究方法の諸問題
9. スラヴ諸語の育成と批判のための機能言語学の意義
10. 言語学の新傾向の中等諸学校における利用<sup>(2)</sup>
  - a. 母語の教授において
  - b. スラヴ諸語の教授において

前述の如く、このテーゼの原文はチェコ語であったが、*TCLP I*に Louis Brun による第9項までの仏訳が発表され、以後数十年間、これがテーゼそのものと見なされて来た。この誤解を訂正し、原文を公刊したのが Vachek (1970) であり、以後、この原文による独訳および英訳3種<sup>(3)</sup>

が発表されている。しかし、わが国ではこの種の情報の入手がかなり遅いようで、1975年以降に公刊されている部分的邦訳2種<sup>(4)</sup>は、いずれも原文によっていない。もちろん、Brun の訳は、Vachek (1970, p. 68) の言う如く、“起草者たちの絶えざる監修”を経ており“本質的に忠実”なものではあるが、プラハ学派の基本的な考え方を知るためには、“源泉にまで (ad fontes) おもむくことが必要”であろう。

実際、Vachek (1983) によれば、Brun の訳にもいくつかの問題点がある。これらの問題点がある程度明らかにするには、原文と対比する必要があるが、Vachek (1983) はそれを部分的に試みているが、特に問題が集中しているのは第3テーゼのように思われる。しかも、このテーゼは、言語の機能と関連して、通常の意味での言語研究と文学、特に詩学研究との接点となる内容を持ち、多くの人の関心を集めている。たとえば、前述の邦訳2種について見ても、轡田・小瀧 (1975) —以下1975邦訳—は<第三テーゼ>の部分のみであるし、北岡・大内 (1982) —以下1982邦訳—は第3項までで以下は省略されており、その関心度の高さを示している。(これは特にロシア形式主義の詩学と関係している。)そこで、本稿では、まず原文と Brun その他の訳との対比により主な問題点を考察し、次いで原文から直接の邦訳を試みる。もとより十分とは言えないが、多少なりとも参考になろうかと思う。特に、日本における各種詩作品の批評の場合に、ある程度客観的基準を設定するのに役立つ可能性がある。

第3テーゼの原案起草者は、Vachek (1970) によれば、B. Havránek と J. Mukařovský で、前者は 3. a. と 3. b. の部分を、後者は 3. c. を担当した。ただし、この原案は、サークルの特別委員会の他のメンバー、すなわち、V. Mathesius, R. Jakobson その他によっても細かく検討され、論議され、サークルの合議の結果としてまとめられた。これはテーゼ全体についてなされたことであるが、それでも原案起草者の基本的主張の特徴がある程度認められる。これは、Havránek および Mukařovský の他の著作との対比で理解されよう。

### <第3テーゼの翻訳と関係する主な問題点>

(1) まず標題が検討を要する。原題は *Problémy bádání o jazycích různých funkcí, zvláště v jazycích slovanských* であるが、Brun の訳では PROBLÈMES DES RECHERCHES SUR LES LANGUES DE DIVERSES FONCTIONS であり、はっきりとした食い違いがある。すなわち、原題の *zvláště* 以下(「特にスラヴ諸語における」)が抜けており、Brun 訳のテーゼの中ではこの項の標題だけが直接スラヴ語との関係を示していない。これは意図的なものではなく、偶発的な誤りと思われるが、当然ながら Brun 訳による他の翻訳、たとえば邦訳にも影響を及ぼしている。すなわち、1975邦訳では「言語の多様な機能に関する研究の諸問題」とされ、1982邦訳では「相異なる機能を果たす諸言語の研究に関する問題」となっている。しかし、これらの訳は原題の意図するものとは異なる印象を与える。その例証として Vachek (1983) の英訳で

は、PROBLEMS OF RESEARCH INTO LANGUAGES OF DIFFERENT FUNCTIONS, ESPECIALLY SLAVIC とされ、多少の差を見せている。

この原題については、その中に複数形(6格)<sup>(5)</sup>で用いられている *jazyk* という単語が決定的な役割を持つ。この語は仏語の *langue*, 英語の *tongue* に該当し、ほぼ同じ意味であり、たとえば Šmilauer (1972<sup>2</sup>) では Saussure の *langue* と同じ術語として規定されている。<sup>(6)</sup>従って、これを「言語」という日本語で示すことが可能である。しかし、*jazyk* は、*langue* と同様、*japonský jazyk* (「日本語」) のような場合のほか、3. b. の見出しとなっている *spisovný jazyk* (「標準文語」) のように、ある言語内の機能的言語組織の場合にも用いられる。従って、原題中に2度使われている *jazycích* は、日本語では訳し分ける必要があるだろう。すなわち、スラヴ諸語がそれぞれ機能を異にするのではなく、スラヴ諸語の内部にそれぞれ標準文語、詩的言語のような機能的言語組織があることを指摘しているのである。プラハ学派は、特に Mathesius を中心として、ある言語内のゆれ、すなわち文体論的差異の研究を重視する。<sup>(7)</sup>それは、言語を体系の体系、組織の組織と見なすからである。言いかえれば、たとえば日本語という言語(包括的なラング)は、具体的には標準文語その他の機能性を持つ方言(包括的なラングのある特性を共有しながらそれぞれ機能を異にするラング)の形を取る、と言えよう。これは、第3テーゼを注意深く読むだけでも十分に理解され得るし、最近の言語研究では特に強調されている点である。

(2) 「標準文語」(*spisovný jazyk*)と「詩的言語」(*básnický jazyk*)は、第3テーゼの主要テーマであり、プラハ学派の特徴の一面を集約的に示している。両者の関係はやや複雑で、特に3. a. b. と、3. c. の起草者が異なるせいも、このテーゼだけではわかりにくい。その一因は用語的な問題である。すなわち、3. c. では、詩的言語は伝達用言語(*sdělovací jazyk*)と対比されているが、後には *spisovný jazyk* 全体と対比されるようになった。<sup>(8)</sup>この関係は、Mukařovský (1932), (1940) で明示され、Havránek, Mukařovský, Vodička (1947) その他で確認されている。従って、3. c. 中の *sdělovací jazyk* という語は、すべて *spisovný jazyk* の機能の一部と考えるべきである。

この *spisovný jazyk* の Brun 訳は *la langue littéraire* で、日本語には「文章語」(1975邦訳) および「標準語」(1982邦訳) と訳されている。しかし、原語の含む概念はかなり複雑で、Havránek (1963) および最近では Jedlička (1982) が示すように、広範囲にわたる機能を持つ。Vachek (1983) の英訳形は *the standard literary language* であるが、おそらくこの語も補足的説明又は性格規定を必要とする。すなわち、この機能的言語組織は、広い意味での標準性又は規範性を持ち、文語的性格が強いが、いわゆる書き言葉だけではなく、一般的には話し言葉として用いられることが多い。これは歴史的に形成されたものであり、公共生活での伝達用言語の代表で、いわばあらたまった場面で使用される言語組織である。<sup>(9)</sup>これと対比されるのは *lidový jazyk* ——*la langue populaire* (Brun), 「通俗語」(1975邦訳), 「常民の言語(方言)」(1982邦訳)——

又は *obecný jazyk* (「一般常用語」) であり、少なくともチェコ語では確立された命名となっている。全体的な意味は英語の *the standard language* に近いが、形としてはドイツ語の *Schriftsprache* とほぼ同じである。<sup>99</sup>従って、日本語としての「標準語」や「文章語」又は「共通語」は、*spisovný jazyk* のある面を示すと思われるが、その意味内容をできるだけ多く伝えるには他の工夫が必要で、「標準文語」もその一つである。

「詩的言語」も日本語として未熟の感があるが、意味は比較的理解しやすいであろう。

標準文語と詩的言語の関係は、Mukařovský (1932), Havránek (1932) などにより詳細に論じられている。

(3) 「自動化」(*automatizace*) と「顕勢化」(*aktualizace*) も第3テーゼにおける重要な対比概念である。前者は、ある要素が自動的前提、すなわち当然のものとして意識にのぼらなくなる状態を指し、後者は、何等かの理由によりその自動化が解除されて意識の前面に出てくる状態を言う。従って、*automatizace* を「潜在化」、*aktualizace* を「顕在化」とすることもできよう。一般に、*automatizace* は容易に理解されるが、*aktualizace* は説明困難な、少なくとも日本語で表現しにくい点があり、「アクチュアリゼーション」(1975邦訳)、「現勢化」(轡田)、「前面化」(1982邦訳)と訳されている。Vachek (1983) は、英訳形として *foregrounding* が適切であるとしており、これを「前景化」と訳すならば、*automatizace* は「背景化」としてもよさそうである。しかし、いずれにせよ補足的説明が必要であろう。「顕勢化」も一つの工夫であり、「引立つこと」とほぼ同義で、「潜勢化」<sup>100</sup>と対比される動的な意味が伝えられるかと思う。

他にもいくつかの問題が考えられるが、それらは以下に提示する訳とその注の中で考察することにする。

〈プラハ言語学サークルのテーゼ 第3項〉

各種の機能的言語組織についての、特にスラヴ諸語における研究の諸問題

a, 言語の各種機能について

ある言語組織の研究は、言語の各種機能の多様性と、一定の場合におけるそれらの実現手段の多様性を正確に考察することを要求する。これら各種の機能と手段に対する考慮なしでは、どのような言語組織についても、共時的にせよ通時的にせよ、その性格記述はゆがめられたものとなり、かなりな程度まで虚構とさえなる。これらの機能と手段に従って、その言語組織の音声的および文法的構造、さらにその語彙構成まで変化するのである。

1. 内面的言語活動と外面的言語活動<sup>49</sup>とを区別する必要がある。外面的言語活動は、話し手の多くにとって、特別な場合にすぎない。言語形式を用いるのは、実際に話す場合よりも考える場合の方が多いためである：それゆえ、言語の外面的音声面の持つ重要性を一般化したり過大評価したりするのは誤りであり、言語の潜在的現象に特に注意する必要がある。

2. ある言語組織の性格記述のための重要な特徴は、言語現象の知性又は情緒性である。この両特徴は、相互に浸透していることもあれば、一方が他方に対して支配的になっていることもある。

3. 知的な外面的言語活動は、決定的に社会的目的を持つ（すなわち他者との接触に向けられる）；情緒的言語活動も社会的目的を持つことがある。すなわち、聞き手にある種の情緒喚起を望む場合もある（喚情的言語活動）。又は話し手の単なる情動放出で、これは聞き手とは無関係に行われる。

社会的役割の点では、言語活動それ自身と言語外の現実との間の関係に従って、それぞれの言語活動を区別する必要がある：つまり、言語活動は伝達の機能を持つ、すなわち表現される対象に向けられるか、又は詩的機能を持つ、すなわち表現それ自体に向けられるか、のどちらかである。伝達の機能を持つ言語活動の場合、二つの重力の方向を区別する必要がある：一つは、言語活動が情況的な場合、すなわち言語外の諸要素による補充に頼る方向（实际的言語活動）であり、他の一つは、言語活動ができるだけ閉鎖的な全体を形成しようと努力する場合で、これは完全性および正確性を求めようとし、術語に等しい単語、および判断に等しい文を用いる方向（理論的又は定式的言語活動）である。

ある機能が完全に決定的な力を持っている文の形式、およびいくつかの機能が相互に浸透しあっている文の形式を研究することが望ましい；その際、基本的なのは、各種機能のさまざまな実勢的階層化についての問題である。

言語活動のそれぞれの機能は、それ自体の慣習的組織——言語そのもの（“ラング”）を持って

いる；それゆえ、ある機能を言語組織（“ラング”）と、他の機能を現実の発話（“パロール”—ソシュールの用語による）と同一視すること、すなわち、知的機能を“ラング”と、情緒的機能を“パロール”と同一視することは誤りである。<sup>43</sup>

4. 言語活動における表現方法は：一つは口頭による表現であり、それはさらに環境によって区分される。すなわち、聞き手に話し手が見えているか、又は見えないかである。もう一つは、文字による表現である。<sup>44</sup>

又第二の分類として、相互に中断しあう（対話的）言語活動と一方的で一貫した（独話的）言語活動がある。

どの方法がどの機能と結びつくか、どの程度までそうなのか、査定することが重要である。

聞き手と直接に接触する場合、口頭による表現に付随しそれを補充するジェスチャーを組織的に研究する必要がある；それらは、地域的言語グループの問題<sup>45</sup>にとって重要である。

5. 言語の階層化にとって重要な要因は、言語的接触に参加する者の間の関係である：それらは、社会的なまとまりの程度、専門的、血統的および家族的社会的性、さらに、都市の言語における諸言語組織の混在に示されるような話し手の多集団への帰属性である。諸方言間の接触のための言語（いわゆる共通語<sup>46</sup>）、特殊言語、非母語の媒体との接触のために適応する形になった諸言語の問題、および諸都市における言語的階層分化の問題がここに属する。

通時的言語研究においても、これらの言語的形成物の強力な相互的影響に対して注意を払うことが必要である。それは地域的な影響ばかりではなく、さまざまな機能を持つ言語組織、さまざまな言語表現の方法、さらにさまざまなグループや団体の言語の影響でもある。

スラヴ諸語の分野におけるこれらの機能的方言学の研究は、まだほとんど始められてさえいない。たとえば、情緒的言語手段についてのある程度組織的な研究は、現在完全に欠落している。諸都市における言語の研究も、ただちに組織化されるべきであろう。

#### b, 標準文語について

政治的、社会的、経済的および宗教的諸条件は、標準文語の形成にとってただ外部的な要因にすぎない；それらは、標準文語がまさにある方言から生じたのはなぜか、ある時代に出現して定着するようになったのはなぜか、を説明する補助にはなるが、なぜ民間常用語<sup>47</sup>と判別されるのか、又どの点で判別されるのかは説明してくれない。

この判別は、ただ標準文語の保守性という点だけで見ることにはできない；標準文語は、文法や音声組織の点で保守的であっても、語彙の点では常に創造的であるし、又一方で、ある地域の方言の過去の状態のみを代表しているわけでは決してない。

標準文語の判別は、その役割の果たし方でなされる。特に、標準文語に課せられた、民間常用語に対するよりも大きな要求による；標準文語は、文化的、文明的生活（科学的、哲学・宗教的、

社会・政治的および行政・法律的思想の段階および結果)を表現する。この役割は、専門的情報と定式化という目的を伴ない、まず何よりもその語彙を拡大し変化させる(知性化させる); 現実生活と直接関係を持たない物事および新しい物事についての表現の必要性は、民間常用語が持っていない、又はその時まで持っていなかった新しい言語的表現を要求する; 又、現実生活でよく知られた物事についても、正確な組織的な表現の必要性は、概念に等しい単語、論理的抽象化、および言語的手段による論理的カテゴリーのより正確な限定、そのための言語的表現を求めようとする努力に導く。<sup>69</sup>

この標準文語の知性化に対して、思考の諸過程の相互依存性と複雑性を表現することの必要性も作用を及ぼす——それは、単に適切な抽象概念のための言語表現ばかりでなく、統語論的諸形式によっても(たとえば、より正確に定式化された従属節を工夫することにより)示される。さらに、標準文語の知性化は、情緒的諸要素の統御(検閲)の強化(婉曲語法の育成<sup>69</sup>)によっても示される。

言語に対するより注意深く、より要求の多い態度は、標準文語のより規制的な、より規範的な性格と結びつく。標準文語にとって特徴的なのは、文法的語彙的諸要素のより大きな機能的使用(特に、語群の単語化の拡大と、より正確な機能の限定であるが、それは、表現手段の決定性を高めることにより、又それらの区別をもっと特殊化することの中にあられる<sup>69</sup>)、さらに、より豊富な社交的言語形式(言語的エチケット)である。

標準文語の発展の中には、自覚的な意図を持つ役割の増加がある; そのあらわれは、さまざまな言語改革の形(特に純化主義)、言語政策、その時代の比較的一貫した言語的趣味に対する関心(時代に応じて変容する言語美学)である。

標準文語の性格的な特徴は、一貫した言語活動の中で、特に文字による発話の中で最もよく示される。書き言葉は、標準文語の話し言葉に強く影響する。

標準文語の話し言葉は、民間常用語とへだたる程度が小さいが、それらの境界は、全体的にはっきりしている。民間常用語とよりへだたっているのは、一貫した発話、特に公やけの演説、講義などの言葉である。民間常用語により近いのは、相互に交代する発話(会話体)で、それは、標準文語の規範的形式と民間常用語との間の中間的諸段階を形成している。

標準文語にとって特徴的なのは、一方では拡張への努力、“コイナー”(共通語)の機能に向う努力であり、他方では支配階級の独占的な指標となろうとする努力である。この両方の傾向は、その言語組織の変化の特徴と、音声的レベルでの保守性の中にあられている。

標準文語のこれらの性質すべてについての探究が、スラヴ諸語の標準文語の共時的および通時的分析の場合に、なされなければならない。これらの分析は、民間常用諸方言の分析を模範にしてなされてはならないし、又、標準文語の生命や発展の外部的条件の分析のみに制限されるべきでもない。



c, 詩的言語<sup>2)</sup>について

詩的言語は、長い間、言語学では閑脚された領域のままだった。その基本的な問題の集約的な研究は、やっと少し前に始ったばかりである。スラヴ諸語の大部分は、詩的機能の観点から、これまでほとんど研究されていない。文学史家たちが時々これらの問題に触れてはいたが、言語についての方法論的問題について十分な用意ができていなかったため、重要な誤りを避けることができなかった。この方法論的誤りを処理しないならば、詩的言語における具体的な事実の検討を成功させることはできない。

1. 詩的言語の共時的記述の諸原理を研究して見出すことが必要であり、その際、詩的言語と伝達用言語を相互に同一視するという、繰返し起る誤りを避けねばならない。共時的視点からの詩的発話<sup>3)</sup>は、詩的表現（パロール）の形、すなわち個々の創造行為として、一方では実勢的な詩的伝統（詩的言語組織——ラング）を背景とし、他方ではその時代の伝達用言語を背景として評価されるものである。詩的発話のこの両言語組織に対する相互関係は、非常に複雑で多形式であり、共時的にと同様通時的にも注意深く研究すべきである。詩的発話の特別な性質は、葛藤と新形態化<sup>4)</sup>の要因の強調であり、それについての特色、方向および新形態化の尺度は非常に多種多様である。そこで、たとえば、詩的表現の伝達用言語への接近は、一定の詩的伝統に逆らうことによって引き起される；詩的表現と伝達用言語との相互関係自体が、ある時代には特に明らかであり、別の時代にはほとんど経験されない。

2. 詩的言語の個別的なレベル（たとえば音素論、形態論）は、相互に非常に密接に結びついているので、文学史家たちがしばしばそうして来たように、他のレベルには何の考慮も払わずに、あるレベルだけを研究することはできない。

詩的発話は表現それ自体に向けられている、というテーゼから生ずるのは、伝達用発話の中ではただ補助的な役割しか持たないでいる言語組織のすべてのレベルが、詩的発話の中では、多かれ少なかれ自立的な価値を得る、ということである。これらのレベルの中で組織化されている言語的諸手段と、レベル相互の関係は、伝達用発話の中では自動化し、詩的発話の中では顕勢化する傾向がある。

さまざまな言語的要素の顕勢化の段階は、個々の詩的表現および個々の詩的伝統において異なっている：このことにより、個々の場合に、詩的価値の特定の階層化が与えられる。当然ながら、詩的言語組織と伝達用言語組織の両者に対する詩的表現の関係は、個々の言語的要素について、それぞれ異なっている。詩的作品は機能的構造であり、その個々の要素は全体との関連なしには把握できない。客観的に同一とされる諸要素も、さまざまな構造の中で、全く異なる機能を持ち得る。

詩的言語組織では、その言語の音素体系やその文字による等価物では用いられないような、音響的、調音的および文字的要素が顕勢化され得る。にもかかわらず、伝達用発話の音素と詩的発話

の音価が関係を持っていることは疑う余地がない。詩の音声構造の諸原理を発見し得るのは、ただ音素論的視点のみである。詩的音素論に属するのは次の如くである。伝達用発話と関係する音素目録項目の利用の程度、音素結合（特にサンディーにおけるもの）を導く諸原理、音素集団の繰返し、リズムおよびメロディー。

韻文の発話は、それぞれの価値の特別な階層関係によって特徴づけられる：リズムは組織化の基本原則で、韻文に関する他の音素的要素がそれと密接に結びついている：メロディー、音素および音素集団の繰返しがそうである。さまざまな音素論的要素とリズムとの総合が、韻文についての規範的手段（脚韻、頭韻など）をも生ぜしめる。

主観的なものにせよ客観的なものにせよ、音響的又は調音的観点は、リズムについての諸問題を解決することができない。それらを解決できるのは、ただ音素論的解釈のみである。音素論的な解釈は、音素による基本的なリズム、付随的な文法外的諸要素、および自立的諸要素それぞれの間の区別をする。韻文比較技術の諸法則は、音素論的な基礎によってのみ定式化できる。外部的には全く同一の2つのリズム構造は、もしそれらが各自の音素体系の中で異なる役割を持つ諸要素によって構成されているならば、根本的に区別され得る。<sup>24</sup>

韻文のリズム、脚韻などによって実現される音的構造の平行性は、さまざまな言語的要素を顕勢化する、最も有効な手段の一つである。相互に似かよっている音構造を対比することは、統語論的、形態論的、意味論的構造の一致および不一致を強調する。脚韻でさえも、抽象化された音素論的事実ではない；類似した形態素を並置する場合（文法的脚韻）も、逆にそれらの並置を拒否する場合も、どちらも形態論的構造を発見させる。脚韻は、統語論とも（どのような文構成要素が脚韻の中で取りあげられ並置されるかという点で）、又辞書とも（脚韻によって取りあげられた単語の重要性がどんなものか、それらの意味論的親近性がどの程度かという点で）、密接に結びついている。統語論的構造とリズム構造とは、それぞれの境界が一致していても、又一致していなくても（行またぎ<sup>25</sup>）、密接な相互関係にある。両者の構造の自立的価値は、それぞれの場合に強調される。リズム構造も統語論的構造も、韻文作品の中では、リズム＝統語的範例によるばかりでなく、それらの範例からの逸脱によっても、強調される。リズム＝統語的文彩は、特徴的なイントネーションを持ち、それらの繰返しは、通常の発話のイントネーションの関係を歪曲するメロディーの衝撃を作り出す。それによって又、韻文のメロディーおよび統語構造の自立的価値が明らかにされる。

詩の語彙も、詩的言語の各レベルと同様に顕勢化される。それは、ある詩的伝統からか、又は伝達用言語からか、そのどちらかから離脱する。異例の単語（新語、破格語、古語など）は、その音効果が、伝達用発話での常用語と異なっているというそのことで、すでに詩的な価値を持っている。なぜなら、常用語はひんばんに使用される結果、その音構成が細かい所まで注意されなくなり、ただ大まかに予測されるだけだからである；異例の単語は、詩の語彙の意味論的文体論

的に多様な形式を、さらに豊かにする。新語の中では、特に単語の形態論的構成が顕勢化される。単語の選択の際には、ただ個別的な異例の単語ばかりでなく、語彙的環境全体が問題になる。それらが相互に干渉し合い、その干渉によって語彙材料が活性化するのである。

詩的な顕勢化の豊かな可能性を統語論は提供するが、それは詩的言語の他の諸レベル（リズム、メロディーおよび意味）との多様な結びつきのためである；その際、その言語の文法組織では利用度の弱い統語論的諸要素が、特別な負荷を持つようになる。たとえば、自由度の高い語順を持つ諸言語では、<sup>89</sup> 語順が詩的発話の中で本質的な機能を持つようになる。

3. 研究者は自己中心的なやり方、すなわち、過去の詩に関する事実又は他民族についての事実を、研究者自身の詩についての慣習や自分自身が教育された芸術的規範の観点から分析したり評価したりすることを避けなければならない。もちろん、過去の芸術的現象は、別の環境の中でも存続したり、又は能動的な要因として復活し、新しい芸術的価値の構成要素となる可能性がある。しかし、その際、当然ながらその機能は変化し、その現象自体も適切な修正を受ける。詩作の歴史は、変更された形でのその現象を過去の中に投影すべきではなく、その現象をそれが生じた時の組織と関連させて、その最初の機能の中に復元させるべきである。どの時代に対しても、特別な詩的諸機能の明確な内在的分類、すなわち詩の各ジャンルのリストが必要である。

4. 方法論的に最小の研究しかなされていないのは、単語、文およびより大きな範囲の構成単位についての詩的意味論である。比喻や文彩によって充足される諸機能の多様性はまだ研究されていない。作者の提示形式として示される比喻や文彩と並んで、本質的な要素でありながら同時に最も研究されていないのは、芸術的現実の中に投入されて主題の構成の中に含まれる、客観化された意味論的諸要素である。たとえば、変身は比較と同類の意味を持つ、など。主題自身、意味的に構成された構造であり、主題の構造の諸問題は詩的言語の研究から除外され得ない。

5. 詩的言語の諸問題は、文学史研究の中で従属的な役割を持っている場合が多い。しかし、他の記号論的構造と区別する手段となり、芸術を体系化する徴候は、記号によって示されるものではなく記号そのものを対象とする傾向である。<sup>90</sup> そこで、詩の体系化の指標は、言語表現を対象とする傾向である。記号は芸術体系の中で支配的な要素であり、もし文学史家はその研究の主な対象を、記号ではなく記号によって示されるものにするならば、もし文学作品のイデオロギーを独立した自立的存在として研究するならば、研究対象の構造の価値的階層関係を破壊することになる。

6. 詩的言語の進展の内在的性格は、文学史の中で、多くの場合、文化史的、社会学的又は心理学的逸脱によって、すなわち異質な現象への依存によって、別の物にすりかえられてしまう。異質な体系間の因果関係による神秘化の代りに、詩的言語そのものの研究が必要なのである。

さまざまなスラヴ語の詩における利用は、比較研究にとって非常に貴重な資料である。収斂的な諸事実を背景として、拡散的な構造的な事実が与えられるからである。現下の課題は、スラヴ諸

語のリズムとユーフォニーの比較研究, スラヴ諸語の脚韻の性格の比較研究などである。

〔注〕

- (1) 本稿は、いわゆるプラハ言語学サークルのテーゼについての研究の一部で、飯島 (1987) に続くものであり、記述にはそれと多少の重複がある。
- (2) 飯島 (1987) 参照。
- (3) Scharnhorst & Ising (1976独訳); Johnson (1978英訳), Burbank (1982英訳), Vachek (1983英訳)
- (4) 轡田・小瀧 (1975邦訳) ただし<第三テーゼ>のみ。北岡・大内 (1982邦訳) ただし第3項まで。
- (5) いわゆる地 (所) 格又は前置格。
- (6) Šmilauer の同書 (p. 17) では、チェコ語の *řeč* を Saussure の *langage*, *jazyk* を *langue* と明確に規定している。
- (7) Mathesius の諸著作, 特に Mathesius (1942) 参照。
- (8) 実際に, Havránek と Mukařovský の間には意見の相違が見られる。たとえば Havránek (1932) では, *spisovný jazyk* の機能を大別して *sdělovací* と *estetická* とし, *básnický jazyk* を *spisovný jazyk* の機能的言語組織の一部としている。それに対し, Mukařovský (1932) には “*jazyk básnický* は *jazyk spisovný* の一種ではない” という明確な記述がある。ただし, 詩作の背景として *spisovný jazyk* があるという点では両者の意見が一致している。
- (9) *spisovný jazyk* は, 話し言葉として発音の面でも強い規範性を持っている。たとえば Dokulil et al (1986) (p. 93) には “基本的 (中立的) スタイル” として, 公共生活での伝達用発話における発音の定義がある。
- (10) Jedlička (1982) (pp. 40-41) にはドイツ語と他の諸語における用語の対照表があり, *Literatursprache* は *langue littéraire* (仏), *literaturnyj jazyk* (露), *književni jezik* (セルビア・クロアチア): *Schriftsprache* は *spisovný jazyk* (チェコ): *Standardsprache* は *standard language* (英), *standardni jezik* (セルビア・クロアチア) にそれぞれ該当し, ほぼ同じものであるとしている。又 Havránek は, *spisovný jazyk* の規定の一つとして, 「教育のある階級の使用する言語」をあげていたが, 後にこれを訂正した。Havránek (1963) 参照。
- (11) 言うまでもなく, 言語における潜在性はプラハ学派の基本的前提の一つである。第3テーゼ a. の 1. 参照。
- (12) 原語は *řeč projevová*. Brun 訳は *le langage manifesté*. 意味としては「表面に出された言語活動」。
- (13) Saussure によればラングは *norme des faits de langage* であり, パロールは *acte individuel* であるが, この説明は当時の傾向についての注意であろう。
- (14) 書き言葉の研究もプラハ学派の重要課題と考えられている。
- (15) この原語は *problém oblastních jazykových skupin* のみであるが, Brun 訳は *le problème des alliances régionales linguistiques* で, (p. ex. *gestes balcaniques communs*) という補足がある。しかし, 原文にはカッコ内の部分がない。ただし, Vachek (1983英訳) には (e. g. *the gestures common to Balkan languages*) があり, この部分は Brun 訳と一致する。*oblastní skupiny* (「地域グループ」) については第1テーゼ c. ですでに取りあげられているが, *jazykový svaz* (=Sprachbund 「言語同盟」) という語は用いられていない。
- (16) 原語は *jazyky obecné* (複数形)。Brun 訳は *langues dites communes*; Vachek (1983英訳) は *common colloquial languages* である。
- (17) 原語は *jazyk lidový*. Brun 訳 *langue populaire*. Vachek 訳 *popular language*. これには「公式でない言葉」という含みがある。
- (18) 第3テーゼ a. の 3. 参照。

- (19) 原語 *kultura*. Brun 訳 *culture*. Vachek 訳 *cultivation*. 原語には「人工的に育てること」の意味がある。
- (20) 原文は…*přesnější vymezenost funkcí, která se jeví větší určitostí vyjadřovacích prostředků a ve speciálnějším jejich rozlišování* で, Brun 訳…*délimitation plus précise des fonctions qui se traduit par la tendance à éviter l'équivoque et par une plus grande précision des moyens d'expression* とはやや異なる。Vachek 訳は…*more precise delimitation of functions revealed by the greater definiteness of the means of expression and by their more specialized differentiation* で, 原文に近い。
- (21) 「詩の言葉」という訳語でもよいかと思うが, 多義にわたるおそれがある。
- (22) 原語は *básnická řeč* であり, Brun 訳は忠実に *langage poétique* となっているが, Vachek 訳の注 (p. 120) では, この原語は Jakobson および Trubetzkoy の母語であるロシア語の *reč* の影響で誤用されたとし, *poetic utterance* という表現を作り出している。
- (23) 原語 *přeformování* で, Brun 訳は *déformation*. Vachek 訳の注 (p. 120) では, *déformation* はマイナスの連想があって望ましくないとし, Mukařovský まだがこの語を使ったことを残念がっている。事実, 標準的なチェコ語辞典 *Slovník spisovného jazyka českého* によれば, 基本形の動詞 *přeformovati* は, 「何かに新しい形を与える」という意味で, 「帽子」や「社会」を目的語とする用例が出ている。又, 最新のチェコ英辞典 I.Poldauf: *Česko-anglický slovník 1986* には, *přeformovat* は英語の *re-form, reshape* と説明されている。そこで Vachek は *reshapement* と英訳しているが, この点は Mukařovský と意見を異にするかも知れない。芸術関係の用語として *déformation* はかなり定着度が高いと思われる。
- (24) この点に関しては Jakobson や Mukařovský その他の実際の分析が参考になる。
- (25) 原語 *enjambement*.
- (26) 原語は *v jazycích s volným slovosledem*: (「自由な語順を持つ諸言語では」) Brun 訳は *dans les langues à ordre des mots variable*: 1975邦訳「語順の変化する言語の中では」, 1982邦訳「語順が可変的である言語の場合は」: Vachek 訳 *in languages in which the word-order is not grammaticized*. 実際には, 語順は全く自由なわけではなく, いわゆる Functional Sentence Perspective (機能的文構成) との関係などで決定される。Mathesius (1961) 参照。Vachek の表現 (「語順が文法 (的に固定) 化していない言語では」) は, それを含みにしているのであろう。
- (27) もちろん, Saussure の *signifié* と *signifiant* の区別と関連している。つまり, *signifié* と *signifiant* をできるだけ分離しようとする傾向, 又は *signifié* と *signifiant* の対応関係を 1対1ではなく多対多とする傾向と言えるであろう。

#### 参考文献

- Brun, L. (1929 仏訳) “Thèses présentées au Premier Congrès des philologues slaves” *TCLP I*. pp. 33-58.
- Burbank, J. (1982 英訳) “Theses Presented to the First Congress of Slavic Philologists in Prague, 1929” Steiner (1982) pp. 3-31.
- 千野栄一 (1972) 「プラーグ学派の言語観」『言語研究』第61号 pp. 1-16.
- Dokulil, M. et al. (1986) *Mluvnice češtiny (I)*. Praha
- Garvin, P. L. (ed.) (1964) *A Prague School Reader on Esthetics, Literary Structure, and Style*. Washington D. C.
- 服部四郎・川本茂雄 (編) (1978~1986) 『ロマーン・ヤーコブソン選集』I~III 東京. 大修館。
- Havránek, B. (1932) “Úkoly spisovného jazyka a jeho kultura” *Spisovná čeština a jazyková kultura*. Praha. pp. 32-84. Havránek (1963) に再録。
- Havránek, B. (1963) *Studie o spisovném jazyce*. Praha.

- Havránek, B. & Jedlička, A. (1960) *Česká mluvnice*. Praha.
- Havránek, B. Mukařovský, J. Vodička, F. (1947) *O básnickém jazyce*. Praha.
- 平井正・千野栄一(編訳)(1975)『チェコ構造美学論集』東京 せりか書房。
- 飯島 周(1987)「プラハ言語学サークルの第10テーゼ」『跡見学園女子大学紀要』第20号
- Jakobson, R. (1962~1985) *Selected Writings*. I~VII. The Hague.
- Jakobson, R. (1976) *Six leçons sur le son et le sens*. Paris.  
(邦訳) 花輪 光(1977)『音と意味に関する六章』東京 みすず書房。
- Jakobson, R. & Waugh, L. (1979) *The Sound Shape of Language*. Indiana Univ. Press.  
(邦訳) 松本克己(1986)『言語音形論』東京 岩波書店。
- Jedlička, A. (1982) “Theorie der Literatursprache” Scharnhorst & Ising (1932)pp.40-91.
- Johnson, M. K. (1978 英訳) “Manifesto Presented to the First Congress of Slavic Philologists in Prague” Johnson (1978) pp. 1-31.
- Johnson, M. K. (1978) *Recycling The Prague Linguistic Circle*. Ann Arbor.
- 北岡誠司・大内和子(1982 邦訳)「プラハ言語学サークル 第一回スラヴィスト会議提出のテーゼ」水野(1982) pp. 351-78.
- 轡田 収(1975)「プラハ言語学サークルの「第三テーゼ」について」『月刊 言語』1975年4月号。pp. 59-62.
- 轡田収・小瀧照夫(1975邦訳)「プラハ言語学サークル <第三テーゼ> 言語の多様な機能に関する研究の諸問題」『月刊 言語』1975年4月号 pp. 52-58.
- Mathesius, V.(1942) “Řeč a sloh” *Čtení o jazyce a poezii. I*. Praha. pp. 10-100. Mathesius (1982) に再録
- Mathesius, V. (1947) *Čeština a obecný jazykozpyt*. Praha.
- Mathesius, V. (1961) *Obsahový rozbor současné angličtiny na základě obecně lingvistickém*. Praha.  
(邦訳) 飯島周(1981)『機能言語学』東京 桐原書店。
- Mathesius, V. (1982) *Jazyk, kultura a slovesnost*. Praha.
- 水野忠夫(編)(1984)(1982)『ロシア・フォルマリズム文学論集 1. 2.』東京 せりか書房。
- Mukařovský, J. (1932) “Jazyk spisovný a jazyk básnický” *Spisovná čeština a jazyková kultura*. Praha. pp. 123-156. Mukařovský (1982) に再録。
- Mukařovský, J. (1940) “O jazyce básnickém” *Slovo a slovesnost. 6*. Mukařovský (1948), (1982) に再録。
- Mukařovský, J. (1948) *Kapitoly z české poetiky I. II. III*. Praha.
- Mukařovský, J. (1982) *Studie z poetiky*. Praha.
- Pražský lingvistický kroužek (1929) “Teze předložené prvému sjezdu slovanských filologů v Praze 1929” Vachek (1970) pp. 35-65.
- Saussure, F. d. (1916) *Cours de linguistique générale*. Paris.  
(邦訳) 小林英夫(1972)『ソシュール 一般言語学講義』東京 岩波書店。
- Scharnhorst, J. (1976 独訳) “Thesen des Prager Linguistenkreises zum I. Internationalen Slawistenkongreß” Scharnhorst & Ising (1976) pp. 43-73.
- Scharnhorst J. & Ising, E. (1976) (1982) *Grundlagen der Sprachkultur Beiträge der Prager Linguistik zur Sprachtheorie und Sprachpflege Teil I. II*. Berlin.
- Steiner. P. (ed.) (1982) *The Prague School Selected Writings, 1929-1946*. Austin.
- Šmilauer, V. (1972<sup>2</sup>) *Nauka o českém jazyku* Praha.
- *Travaux du Cercle Linguistique de Prague (TCLP)*. Praha.  
I. (1929), II. (1929), III. (1930), IV. (1931), V. (1934), VI. (1936), VII. (1939), VIII. (1939)

- *Travaux Linguistiques de Prague (TLP)*. Praha.  
1. (1964), 2. (1966), 3. (1968), 4. (1971).
- Vachek, J. (ed.) (1964) *A Prague School Reader in Linguistics*. Bloomington & London.
- Vachek, J. (1966), *The Linguistic School of Prague An Introduction to Its Theory and Practice*. Bloomington & London.
- Vachek, J. (ed.) (1970) *U základů pražské jazykovědné školy*. Praha.
- Vachek, J. (1983 英訳) “Theses presented to the First Congress of Slavists held in Prague in 1929” Vachek (1983) pp. 77-120.
- Vachek, J. (ed.) (1983) *Praguiana Some Basic and Less Known Aspects of the Prague Linguistic School*. Amsterdam & Philadelphia.

[1987年11月6日受理]